

中学生の「税についての作文」

福岡県納税貯蓄組合連合会 会長賞

税で繋ぐバトン

大川市立大川桐英中学校

三年 大 城 咲 里

自転車を漕いで、暑い七月の風を切る。登校するだけでも暑くてたまらない夏の朝。でも学校に着けば、冷房の効いた涼しい教室が待っている。私にとって朝の教室はまるで天国だった。これは、私の学校生活での日常の一部。しかし、ある日を境に私はそんな日常にも感謝で溢れる毎日を送るようになった。

それは、中学校で租税教室を受けた時。

「お給料は全て貰えるわけではないんだよ。」

と教えていただいた。初めてそれを耳にした時は驚いた。疑問に思った私はじつと耳を傾けて授業を聴き、そのわけを探った。すると、給料からも教育や学校設備に利用する税金が引かれる。そんなことを話されていた。そこで私は、学校の机や椅子、そもそも校舎全体に税金が利用されていると、改めて気づかされる。そして私は、はっとした。教室の天井を見上げ、あの冷房だっって見えない誰かの努力によって動いているんだ。私にとって天国だった教室は、税金が私たちに与え

てくれたもの。もちろんそれだけじゃない。存在が当たり前であまり気にかけない、あの救急車も交番も図書館も。それに毎日通る、あの道路も。何を力に存在するのか。その答えも税金である。税金とは私達にとって、日常生活を支える柱。それに気づいたと同時に、私は自分の中に強い敬意が芽生え始めた。正直、税金の現実と向き合ったあの時。自分で稼いだお金が全て手元に残らないことが、私は不満だった。それでも、国民の大人は汗水垂らして働いて稼いだお金を国に納めている。本当に誇らしく思う。その苦労が私達子供の明日を迎えられる理由。そんな毎日を無駄にせず、次は自分の番だと努力を重ねようとも思う。税の目的とは、国を支えるだけではない。人から人へ国を託すために繋ぐバトンのように、私は見える。

税金の現実と向き合った今。私達若い世代へ伝えたい。どうして自分は支えられているのか。どうして自分は優れた教育が受けられるのか。それはきつと税金が私達に未来への可能性を信じてバトンを繋ぐためだ。そのチャンスを自分自身に生かそう。そして将来は、未来ある子供が鮮やかな日々を送れるよう、精一杯働き、次は自分がバトンを繋ぐ人間になりたい。大人への感謝を証明する為にも私は、自分の夢に向かって努力し続ける手を止めたくない。